

放送利用の広島大学公開講座についての研究

一 講座科目「方言と文化」のばあい 一

江 端 義 夫

(1979年9月20日受理)

はじめに

いま、日本は、生涯教育の時代に移行しようとしている。学校だけで教育が行なわれた時代から、卒業後も自由に学習しうる機会が設けられる時代へと移行することが、今日の時代の要請になってきているようである。筆者は、学習主体の立場を重視し、「生涯教育」でなく、むしろ、「生涯学習」の時代と呼ぶべきだと考えている。

学習の意欲を持つ人々に対して、必要に応じた教育の場を、平等に与え、社会の推移に伴って変化する文化についての再教育や、人間の創造的活動のための教育条件を整えることが、全人的教育の問題として、高齢化社会に向かう日本にとっての重要な課題であろう。

今日、企業内教育、ゼミナール、講習会、通信教育、塾などが、学校外教育の方法として行なわれている。このほかにも、伝達度の高いマス・メディアを利用した方法が、実施されている。

広島大学ほか全国のいくつかの国立大学では、文部省の委嘱を受けて、昭和51年度から、放送教育実験実施委員会¹⁾が設立され、放送大学のための実験番組を作成してきた。広島大学では、昭和52年度に、テレビとラジオの両方で、合計4つの放送講座を作成し、放送した。そして、昭和53年度に放送大学が法制化されたので、放送教育実験実施委員会の仕事は、所期の目的を果し終えた。そこで広島大学では、「放送大学実験番組」という名目をとりやめ、放送を利用した広島大学独自の新しい公開講座として、広く一般市民に学問を開放することを計画したのであった。²⁾

昭和53年度の放送利用の公開講座のテーマは、従来の、総合的で未来的なものから、身近で学問的なものへと転じた。そして、①大学教育としてのテーマ(単位授与の問題) - 「日本国憲法」(テレビ)、②公開講座としてのテーマ(市民の関心) - 「生物の進化を考える」(テレビ)、③地域社会に関連のあるテーマ - 「方言と文化」(ラジオ)が選ばれた。³⁾

筆者は、「方言と文化」の講座の計画の立案に従っ

た。地域社会の方言生活が、とかく無自覚的である現代の事態に鑑み、個々人の方言文化の正しい認識と創造のために、「方言と文化」について、深く考えさせることが、ねらいとされた。

方言と文化が大学の公開講座のテーマになるのは、日本で初めてのことではなからうか。⁴⁾ いわば、公的な場から遠くに位置する「方言」が、袴を着て晴れの舞台に出て来たという感じである。大学の講座であれば、ただおもしろいだけではいけない。科学的であっても、方言事実そのものから離れすぎてはいけない。微妙な心のことば、生命の息吹とも言える方言を、適切にとりあげていくことの困難があった。しかし、日本人の一人一人の人生を大切にすべき時代であればこそ、いっそう、個人の全人格に直結したことば、すなわち方言について学習することに、現代的意義があると考えられるのである。

筆者は、ここで、放送を利用した広島大学公開講座「方言と文化」を、生涯教育(生涯学習)の展開における一実践としてとらえてみたい。この見方に立って、筆者たちが「方言と文化」の放送講座を、どのように実施し、受講者がどのように学習したかを、以下に報告したいと思う。さらには、主として演習指導において提出された学習者の諸意見(諸質問)について考察を深め、今後の課題を論じることにした。

以下は、前篇と後篇とに分れる。前篇は、講座「方言と文化」の実施に関する考察である。後篇は、講座「方言と文化」の演習指導に関する考察である。

前篇 講座「方言と文化」の実施に関する考察

1. 実施要領

本講座実施のあらまは、次のとおりである。⁵⁾

1 受講生の募集

科 目	募集人員	放 送 期 間	放送局
演 習 科 目	方言と文化 150人	昭和53年10月14日(出)→昭和54年 1月6日(出)、毎週土曜日、13週 午後8:00~8:45(45分)	中国放送 (ラジオ)

○募集の広報は三方法によって行なわれた。一つは、募集要項6千部、ポスター1千枚を作成し、市町村教育委員会、企業等の窓口において広報された。二つは、87ヶ所の市町の広報紙に、掲載が依頼された。三つは、新聞・ラジオ・テレビを通しての広報であった。

○受講者は、市民一般であった。

○受講者の決定は、募集人員(150名)の範囲内で、先着順に行なわれた。

○受講料は無料であるが、テキスト代金および郵送料等の必要経費として、1600円が徴収された。

○受講申込先は、広島大学の学生部教務課であった。その受付期間は、昭和53年9月13日(水)から9月27日(水)までであった。

かくして、以下のように、広島地区で120名、福山地区で24名の、合計144名が受講の登録を行なった。⁶⁾

区分	性別		年齢							職業												
	男	女	20才未満	20才代	30才代	40才代	50才代	60才代	70才代	不明	計	公務員	会社員	農林水産業	職	無職	その他	不明	計			
広島地区	47	74	121	3	32	20	36	17	7	6	0	121	16	16	23	4	0	7	21	30	4	121
福山地区	9	14	23	0	6	4	6	2	3	2	0	23	2	2	5	1	0	1	2	9	1	23
合計	56	88	144	3	38	24	42	19	10	8	0	144	18	18	28	5	0	8	23	39	5	144

これによれば、広島地区での受講者が、福山地区でのよりも圧倒的に多い。性別では、女性の方が男性よりも、はるかに多い。年齢別では、20才代未満から70才代以上まで、広く認められる。中でも特に、社会の中堅層者である40才代と20才代に受講者数の多いのは、注目される。それを職業別で眺めると、無職その他(子離れした主婦を含む。)を除けば、会社員・公務員・教員に、受講者が多い。このように、学歴も高く、しかも人と接する機会も多い職種の人々が、方言に関心を持ち、受講しようとしたことがわかる。受講者の中に、農林水産業に従事する人々が少ないのも、注目せざるを得ない。同時に、無職の中に、多くの高齢者が含まれており、本講座受講の動機が多様さを示しているようである。

2 演習指導

放送した内容についての質問を受けて行なう演習指導は、学習者が講座内容をどの程度理解したかについて知る大事な機会である。各回ごとに、出席した受講者は、質問や意見を紙に書いて提出した。講師は、それをもとにして講義し、解説し、討論を行なった。

地区	11月19日(日) 13:30~16:30		12月24日(日) 13:30~16:30		1月7日(日) 10:00~13:00	
	広島	学校教育学原教授 神島武彦	教育学部助教授 江崎義夫	教育学部助教授 江崎義夫	教育学部助教授 神島武彦	学校教育学原教授 神島武彦
福山	文学部助教授 重山敏昭	学校教育学原教授 神島武彦	教育学部助教授 江崎義夫	教育学部助教授 神島武彦	教育学部助教授 江崎義夫	教育学部助教授 江崎義夫

これを本講座の一定の演習形式とした。実施の要領は上表のとおりであった。

さて、次の表は、3回の演習指導に出席した受講者の人数を示したものである。

授業科目	地区	11月19日(日)	12月24日(日)	1月7日(日)
(演習科目)	広島 (120)	42	34	24
方言と文化	福山 (24)	12	8	7
150 (144)	(144)	54 (38%)	42 (29%)	31 (22%)

スクーリングの日は、酷寒であったり、クリスマスの当日であったり、あるいは正月明けて緊張のゆるむ頃であったためか、出席者は少なかった。しかし、出席者の中には、3回ともに出席した人が、かなり多かった。

3 最終試験

受講者に対して、最終試験を実施し、学習効果について調査した。試験期日・時刻は、昭和54年1月15日の13:00~15:30であった。採点は100点満点で行なった。「方言と文化」の最終試験を受けた受講者は広島地区で32名、福山地区で8名、合計40名(28%)であった。

4 修了証書

演習指導、面接指導または最終試験のいずれか一回以上、出席または受験した受講者に、修了証書が交付されることになっている。「方言と文化」では、広島地区で54名、福山地区で12名の、合計66名(46%)が、修了証書を受けた。

以上が、放送を利用した広島大学公開講座「方言と文化」の梗概である。

次には、「方言と文化」の講座内容をどのように構成したか、あるいは、それらをどのように放送番組に取り組みでいったか等について、記述する。そして、その実施に関しての考察を行なうことにする。

2 講座科目「方言と文化」の実施に関する考察

1 科目のねらい

本講座の科目のねらいは、次のとおりである。

方言は心のことばであり、地域社会のことばである。そして、生活のことばである個々人の毎日の方言こそ、日本語の生きた姿である。

この認識を立て、地域文化としての方言の生態を、多面的・総合的に考察し、今後のあり方を展望する。

上記の趣旨を、より具体化して、全13回の講義用テキストおよび放送番組を作成した。それを以下に記す。

2 内容構成上の視点

地域社会に関連したテーマとして、「方言と文化」が選ばれたことは、地域社会に開かれた大学をめざす広島大学の姿勢を示すものとして、重要な意義がある。

地域社会の各個人は、毎日の言語生活に生き、日本語の真に生きた姿としての自己の方言生活に、深い関心を寄せている。しかし、大多数のばあい、方言についての正しい認識を得たいと思いつつも、それを深められないのが、実情ではないだろうか。

この講座科目「方言と文化」では、人々に、方言について正しい認識と自覚とを促すことを目的とした。主に、中国地方の広島県地方での方言を対象とした。方言とは何か、方言研究の歴史と方法、方言の多様な構造、方言と文化の道、方言の動態など、方言についての総合的探求を企図した。言語科学としての方言の研究という視点は、このたびの、一貫した精神であった。

3 講座科目の内容

全13回のテーマおよび内容を、まとめて解説し、担当講師名を付すと、次のようである。

第1回 言語と地域……………神鳥武彦

方言とは何か。第2回以後の総論である。地域社会の方言を把握することは、その地域の人々の宇宙観、世界観を知り、その反映としての地域社会の文化を把握することであるとの認識を提示する。方言学の基礎知識を解説する。

第2回 方言研究の歴史と方法……………神鳥武彦

日本における方言研究の歴史とその方法とについて解説し、問題提起を行なう。

第3回 方言音声……………室山敏昭

方言音声については、巨視的にも微視的にも、問題とすべきことが多い。その中で、中国地方の方言の特に、単語音声と語部音声とについて解説する。

第4回 方言文表現(1)……………江端義夫

方言の敬語法を問題とする。日本語の方言敬語法の特徴を、待遇表現法の一方法として概説する。特に、広島県地方の方言敬語法について、録音資料等を利用しつつ解説する。

第5回 方言文表現(2)……………瀬戸口俊治⁷⁾・室山敏昭

あいさつことばの言語生活を、とりあげる。あいさつことばを、「日常平時的あいさつ」と「特別時のあいさつ」とに二分する。広島県地方のあいさつことばの生活を観察し、民間人の生活思想を論じる。

第6回 方言文表現(3)……………江端義夫

話しの終りの訴えことば(「ナー・ノー・ネー・ニー・ヌー」)について問題とする。また、「ナモン」類文末詞の全国的な分布、「ノヤ」「ノンタ」の瀬

戸内海域での分布などを解説し、文末詞の心を探る。

第7回 方言語彙……………室山敏昭

方言語彙とは何か。中国地方の方言語彙を実例として、語形の地域性、造語法・命名意識の地域性、意味の地域性、体系の地域性の4分野について解説する。

第8回 方言と文化の道(1)……………室山敏昭・町博光⁸⁾

方言や文化は、日本の国土の上を、どのように伝播するか。その伝播には、一定の法則があるか。海の道として瀬戸内海を、川の道として江川をとりあげ、言語文化を伝える水の路について考える。

第9回 方言と文化の道(2)……………江端義夫

言語文化を伝える陸の道として、山陽道・中仙道・東海道をとりあげ、言語地図の分布の語る文化史を論じる。

第10回 方言と生活文化圏(1)……………江端義夫

方言圏を醸成せしめる要因として、行政面で4つをとりあげ(学区、町村域、藩域、県域)、両者の必然性について、分布図を通して考える。

第11回 方言と生活文化圏(2)……………室山敏昭

特定の職業社会(ここでは、農業社会と漁業社会)に認められる語彙の特質について解説する。

第12回 方言の動態……………神鳥武彦

方言の動態を、地域生活の変化・年令差による言語差・場面による言語変化・移住による言語変化について解説する。

第13回 座談会 方言と文化……………神鳥武彦・室山敏昭

小川利夫・羽原好恵
司会 江端義夫

方言と文化についてのまとめの座談会。第1回から第12回までの内容をふまえつつ、発展的に、学校教育と方言、放送のしごとと方言等の問題について、討論をした。そして、方言と文化についての新しい見方や、正しい認識のしかたについて、建設的な討論を行なった。

以上を逆観すれば、いくつかのテーマの欠落が、指摘されるにちがいない。それらのいくらかを列挙してみれば、次のようである。①世界諸言語に見られる方言状況、②日本語方言のアクセント、③方言調査の方法、④方言と標準語との諸問題、⑤日本語方言文法の体系、⑥日本語の系統。これらは、日本の方言について考える問題の、ほんの一部である。他にも大小の課題があり、解くことの困難なテーマが、認められる。

ところで、上記13回のテーマについても、1回の45分で語りうる内容は、きわめてわずかである。たとえ、テキストに力点を置いて、解説すべきことがらを記したとしても、限定された紙数内のことである。不十分であることは否めない。本講座には、「方言と文化の

道(1)(2)」「方言と生活文化図(1)(2)」という、従来の方言学の枠から出たテーマが、4回も認められる。これは、「方言と文化」が総題目であるため、「文化」をとりたてたいとの意向が、前面に強く打ち出された結果である。全13回の講義が、有機的関連を持っていないと、学習効果が高まらない。4人の講師が互いに連絡し合いながら、執筆内容を按排し、自然な流れが生じるように、調整した。それらは、次のようである。

4 テキスト作成上の配慮

テキストを執筆する講師が少数(4人)であり、互いに専門が近似しているため、内容の一貫性と術語の統一とを、かなり徹底させることができた。講師間で配慮した点は、以下のとおりである。

①受講者の知的水準を、大学2年生程度と定めて、テキストの作成にあたる。専門的な度合が高すぎたはいけない。また、概説ふうなものにとどまっても、いけない。

②各回に、かならず講師の新しい研究、意見を盛りこむことに努力する。

③各回の講義の冒頭に、200字程度の概要を記し、導入とする。前後の講義が、無理なく自然に連続しよう心がける。

④第1回から第12回までの方言の内容に、自然な流れができ、体系的な学習が、自然に行なわれるようにする。

⑤大学の講義らしきを出すため、第1章～第5章ぐらいの章立てを、各回ごとに設けて、完結させる。

⑥テキストの文章は、なるべく平易なものにするよう心がける。専門用語を使用するばいも、放送のことを考慮しつつ行なう。

⑦図や表を、できるだけ豊富に盛りこんで、テキストに親しみを持たせる。

⑧各回の講義内容の末尾には、基本的に入手しやすい参考文献を、4・5冊掲出する。

⑨注は入れないことを原則とする。

⑩校正は、執筆者が2校まで行ない、3校は、講座責任者が、通してこれを点検し、校了とする。

さて、テキストを使用して学習した受講者は、テキストについて、種々の感想をよせている。たとえば、専門用語のむづかしさを、あげている。これは、術語を解説するのに十分な頁数がないのが、原因かと思う。

質問の多くが、読図の困難をあげている。テキストに親しみを持たせるために、図や表を豊富に盛りこんだが、これは逆効果であった。方言の地図では、解釈しやすいもの、すなわち、ことばの地理的分布が明瞭

に認められるものを掲出したはずであった。ところが、基礎的な訓練を経ない学習者にとって、その言語地図の図柄は、模様図でしかなかったらしい。筆者たちが、常識で理解しようと考へて省略している部分が、学習者たちにとっては、理解しがたい点であったりする。問題無限である。初学者にも、方言研究者にも納得されるテキストで、しかも魅力のあるテキストを、理想的に編むことは、今後の課題である。

5 放送番組におけるテキストの利用

本テキストは、放送を聴きながら利用するものである点が、特色である。しかしながら、「方言と文化」の放送は、テキストを持った144名の聴き手に対してだけ、行なわれるものではない。そのような心づもりでないようにと、放送局からの要望が、出されていた。タクシーの運転手に聴き入らせる放送でもありたい、と言われたりした。いよいよ、テキストを片手に持って行なう放送のむづかしさが、浮きぼりにされた。

そこで、テキストの利用に関して、最小限の申しあわせ事項として、次の点を考慮した。

①放送にあたっては、テキストの内容の全体に、かならず言及する。一部分を詳しく説明することがあるとしても、一回完結のための調整を、忘れてはならない。

②テキストの文章を、放送用の平易な文章に言い改める。方言の伝播と電波のような同音異義語は、混乱しやすいので、他のことばに変えて言い表わす。

③各国ごとに、方言会話の録音を、積極的に利用して、「方言と文化」の番組を、親しみやすいもの、生きのよいものにしていくよう配慮する。

④“テキストの何頁”“テキストの第何図”というような表現は、いっさい、行なわない。テキストを持たない人が聞いても分かるような放送にするよう、心がける。

⑤テキストに引用された文章は、そのまま読みあげることとはしない。講師が、かならず自分のことばで、まとめて表現する。この方が、聞き手にわかりやすいし、著作権に抵触しない便がある。

6 番組作成上の配慮

上述のテキストの利用法も、すでに番組作成上の配慮であるが、以下には、その他の諸点について記す。

①番組担当のディレクターが、方言のラジオ番組の作成についての経験者であり、出演講師の大半は、その事業の協力者でもあった。今回の番組作成に関して、意志疎通を十分に行なうことができた。

②かつて、ラジオ放送番組「くらしのことば」で、多

年、勉強してきた女性アナウンサーを、本番組の専属にする。

③各回で工夫し、担当講師に、女性アナウンサーが質問して応答形式の授業を組むなど、親しみやすさへの配慮も行なう。

④各回の内容を明瞭に理解させるために、章立ての見出しことばを、女性アナウンサーに朗読させる。

⑤各回の授業展開において、章の区切れめごとに、講座のテーマミュージックまたは交響曲の一部分を流す。気分転換を促し、学習内容の確認をするのに有意義であった。

⑥できるだけ、生の方言会話の録音を資料として使用するよう心がけ、講義ふうにならないようにする。

さて、理想的な番組を作成することは、至難である。1978年5月に、民間放送教育協会は、『大学放送教育実験番組、制作ノート』⁹⁾という小冊子を作り、その中で、昭和53年度の制作方針として、次の5項目をあげていた。

1. 受講者がよくわかる番組にする。
2. 受講者がたのしめる(面白い)番組にする。
3. 受講者が疲れないで、終りまで見れる番組にする。
4. 受講者の希望をフィードバックする。
5. 講師を所謂“タレント”にする。

たしかに、1・2・3は誰もが努力する当然のものである。ところが、4について、テレビでは、スクーリングで出された学習者の意見や希望を、次週の番組みに活かしていくことは、現段階では無理である。将来は、是非とも考慮されなくてはならないだろう。ラジオでの「方言と文化」の番組作成では、スクーリングにおいて出された意見や希望を、できるだけ反映させるよう配慮した。しかし、熱心な学習者を、放送番組に登場させることまでは、していない。

また、最後の5にある“タレント”講師のことである。方言は本来、地味なものである。“粋”なあり方よりも、“やぼ”を採ることにした。ラジオでの放送は、無理に“タレント”ふうを装うことはよくない。ごく自然に、まじめな番組をつくることが大事である。それは、筆者たちの共通の理解であり、放送局の関係者等も、同様の意見であった。

こういう点に、筆者たちの独自の番組観が、出ることになった。著名人を登場させたり、おどけたりしなくても、中味の充実した魅力的な番組を、作成しうるのではないかと考えたのである。

7 番組作成上の諸問題

番組作成上、次下の問題点が論議された。

①方言の番組は、ラジオ向きだと速断されがちであるが、かならずしも、そうではない。この度のテキスト作成では、言語地図や図表が多用された。ラジオ放送で、それらを説明することは、苦勞が多い。言語地理学的研究の進展、言語社会学的研究の展開に伴い、しだいに、方言の番組はテレビ向きになってきていると思われる。今後は、この点についての検討が必要である。

②方言の生の会話資料を、もっとたくさん聞かせてほしいとの意見が、いくども出された。これは、配慮しても、しすぎることはない問題点の一つである。

③講師の話は、もっと、くり返しやよどみや無駄があってもよかったかもしれない。流暢な、立板に水のような話し方は、却って不自然でもある。聞く力は、視る力よりも相当に劣るものである。

④講師間に、話し方の上手、下手がある。ラジオでの放送における声は、話す人の精神をも表わすので、テレビよりも技術が必要であると言える。“放送教育のための話しかた訓練の手引”といったものが、作成されてもいいのではないだろうか。

8 最終試験

1. 評価の方針

最終試験では、受講者の学習した知識量を、評価するのではない。受講者が、自己の言語生活を反省する力、分析する力、一般化する力を、どの程度に習得したかを評価するのである。

2. 出題意図

最終試験は、テキストの持込みを許可するという条件で、作成された。¹⁰⁾

この最終試験の出題は、言語観察力の育成状況、分析力の形成状況、言語理論の理解状況を明らかにすることを意図している。

問題Ⅰから問題Ⅳまでは、自分の生育した地域での言語状況について回答することを求めた設問である。自らの言語活動を内省したり、あるいは他人の言語活動を観察したりするという態度が、どのように習得されたかを見るものである。問題Ⅰでは、実例に照らして、自己の生育地の言語状況を分析作業させる設問である。問題Ⅲは、観察によって得た実例に、どのような言語理論が働いているかを帰納させる設問である。問題Ⅴは、言語理論の中で、最も重要な伝播法則——方言圏論について、どの程度に理解できているか等を、調べる設問である。

受験者40名の得点分布は、次表のとおりである。

得点	10 / 19	20 / 29	30 / 39	40 / 49	50 / 59	60 / 69	70 / 79	80 / 89	計
人数	2	5	12	7	6	5	2	1	40人

30点台が12人で、最も多く、得点の高い方へと、なだらかなスロープが見られる。岸本幸次郎氏¹¹⁾ほかの、厳密なご研究によれば、「方言と文化」の講座では、学習効果と得点との間に、関係があるとして、次のように述べていられる。

「学習状況と得点とが関連する傾向が見られ、テキスト予習は得点と有意な関連を持っている。すなわち、放送視聴前にテキストを「読んだ」者が「読まなかった」者より得点が高い。他の項目では、テキストの復習・関連文献の学習・視聴回数など学習状況が良好な者の得点が高いという傾向が見られる。またスクーリングへの出席回数では、3回とも出席した者に高得点者が多いことが指摘できる。」(『昭和53年度、放送利用の大学公開講座に関する実験報告書』広島大学、1979年、p 74～75)

上のご指摘は、非常にありがたいことである。学習状況が良好であれば、自然に学習効果が高められていくことを実証しているからである。これは、放送教育の理念が、正しく実を結んだものと理解してもよからうかと思うのである。

後篇 講座「方言と文化」の演習指導に関する考察

演習指導の実際を記述することによって、講座科目「方言と文化」に対する受講者の問題意識や、とり組み方等について、以下に考察したい。そして、一般社会人を対象にした広島大学公開講座として、「方言と文化」を実施したことの意味について、考えたいと思う。

1. 演習指導上の諸問題

広島地区、福山地区で、合計3回にわたり、面接指導(スクーリング)が行なわれた。各回ごとに、講師は、広島地区で2人、福山地区で1人が担当した。

①面接指導に参加した受講者は、初めは一人であくさんの質問事項を出したが、2回、3回目になると、それが減り、受動的態度の聴講になりがちであった。

②面接指導に先立って、質問用紙を受講者へ配布しておき、放送での受講中に抱いた疑問点を書きつけ、スクーリングの当日に持参させ、それぞれの講師が面接の場でこれに回答を与えるという形式をとるのも、一つの方法である。

③出演講師は、比較的専門領域が近いため、他の講師が出演した回の質問にも、じゅうぶん回答することができた。

④つみ重ね授業とはちがうため、受講者の質問にも一貫性がなく、基本的な部分が訓育できないままに、終りがちであった。

⑤演習指導の方法や回数や期日や場所などに関して、考慮すべき課題は多い。放送だけでなく、演習指導と併用されていてこそ、教育の名に値するとさえ言える。

演習指導の理想的な方法について、今後さらに検討され続けていかななくてはならない。

2. 演習指導の分析

演習指導に参加した受講者は、全3回の延べ人数が、155名である。出席者には、白紙を手渡して、質問事項、意見を書いて提出してもらった。一枚の紙に、5つも6つも書きつける人もいれば、他方、名前以外には何も書かない人もいた。これらの質問事項を整理してみると、次の10項目にまとめられよう。

- *用語の解説について
- *音声について
- *文法について
- *語彙について
- *方言の位相差について
- *方言の成立・変容について
- *方言の伝播(通時性)について
- *方言、共通語、標準語について
- *日本語の起源と方言について
- *方言と文化の将来について

順次、質問事項(または質問文)をまとめて紹介しつつ、受講者の関心がどこにあり、そこにどんな特色が認められるか等について考えていきたい。記述の順番は、かならずしも、質問の多かった順ではない。

1 用語の解説について

これは、主として、テキスト『方言と文化』の中に見られる文章の中用語について、説明を求める質問である。次のようなものがあった。

「方言、俚言、土語の区別」「方言の二面性とは何か。」「共通語と標準語との区別」「下位言語とは何か。」「日本語共時態と日本語通時態の区別」「高時共時方言学とは何か。」「方言全一体の意味」「方言学と言語学とのちがいが」「方言コンプレックスの実態」「範疇化とは何か。」「文化の定義が抽象的すぎないか。」

これらの用語のどれも、方言を勉強しはじめる者が、

学習しておかなくてはならない基本的なものである。

また一方、スクーリングの早期には、方言調査の方法についての質問が出ている。

「方言調査の目的・手段・方法は？」「どんなことばに焦点をあてて調査するか。」「調査地域の決め方」「今までどの程度の方言調査をしたか。」「種々の調査結果を統一的に同価値で、学べるか。」

このように、調査そのことに関して講師に迫るものがあった。学習者は、知識だけ教えられても満足しない。全国各地の方言調査の体験からにじみ出た、含蓄のあることばを、講師に期待しているようである。

用語の解説を求めたり、方言の調査のしかたを簡単に質問しているようであるが、最も本質的な問題に、適切な質問が出されていると思う。

2 音声について

テレビとちがってラジオでは、音声記号やアクセント表記を、具体的な会話の音声に対応させて講義することが困難である。したがって、スクーリングにおいて、この種の質問が多く提出されているのも、首肯される。たとえば、それらは、次のようであった。

「i e ö ü ç の発音は？」「雲伯方言の家事 kadʒi の発音」「ラ行音の陰在現象とは？」「地名の発音（茨城県はイバラギかイバラキか？）と方言の発音との関係」「話部音声とは？」「全日本アクセントの分布の説明」「同一地域の個人毎にアクセントがちがうのは、なぜか。」「方言に見られる独特なイントネーションについて」「文芸の朗読における方言アクセントの取り入れ方」「広島はどうして東京式アクセントなのか。」

テキストに即しての質問から受講者の内省による質問まで、いろいろに見られた。大小の問題のちがいはあるが、大事なものばかりである。方言の世界は音声言語の世界である。音声についての質問には、いくら時間をかけても、かけすぎることはない。

3 文法について

テキストでは、文法の項目として、「敬語法」「あいさつことば」「文末詞」の3つを、とりあげただけである。3項については、体系的に考える学習を展開している。その他の文法現象は、全13回の授業の中で、随所で、とりあつかわれている。

文法に関しては、放送を聞いたり、テキストを読んだりただで、大方、理解されるのであろう。質問文も、さほど多くはなかった。

「方言の汚さは、敬語が少ないのが、原因ではないか。」「～ンサルから～ンサイへの変化過程の説明」

「ガンスの語源？」「ヤンスの出自は？」「ヤンスの品位の低さと伝播とが直結するか。」「イキ（行き）敬語は、どうして山口県の日本海側には、ないか。」「テ敬語法の共通語訳は、正しいか。」「東日本よりも西日本に、敬語法がより栄えているのはなぜか。」「中部地方の勧誘表現法の説明」「打消過去表現の分布の説明」「どうして、あいさつことばの“オハヨー ガンシタ”が過去形なのか。」「ナモシの全国分布の説明」「文末詞の生成についての説明」
これらの質問を見ていると、放送の内容をよく聞き、テキストも、よく読んでいるな、と思う。事実を述べていく講師のことばには、理由づけが、かならずしも明瞭でないことがある。受講者は、そこをとらえ、どうして、そのようであるのかを問う。もっともである。しかし、すぐに答えられる事柄は少なく、後の課題となるものが多かった。

4 語彙について

受講者の中には、自分の生活語についての方言語彙集を編むために、基礎的知識を得ようとする人もいた。方言のおもしろさで、すぐにも人々の関心をよぶのが、方言語彙ではないかと思う。個々の方言事象の興味ぶかいものが、地域ごとにありえよう。質問は、俚言の語源を問うものや、抽象度の高い質問まで、いろいろであった。

「ガーマー（おそろしいもの）が来た、という語の意義は？」（フレゲナ モンデの訳は、無礼なもので、か。」「方言に漢語が多いのはなぜか。サンニョー（算用）、ゾーヨー（雑用）、ザッパク（雑駁）など。」「バカタレのタレが独立で馬鹿の意味になる理由」「牛の名の方言の全国状況」「九州方言にしか認められない語彙とされている中に、広島でよく使う語がある。特有語彙の見定め方は？」「東条の語彙分類で、2分野以上に渡る同一語の処理のしかたは？」

語彙の話題は、たのしい。受講者が、「私の所では、こう言う」との発言を次々にするので、一座は活気のあるものとなった。

5 方言の位相差について

位相を狭い意味に解して、ここでは2つの質問のみを記す。

「方言の世代差（年令層差）を調査して出すことはむづかしいと思うが可能か。」「方言の地理的伝播は、生業のちがいをこえて進むか。」

方言は、諸位相のからみあいでも成立しているものである。ある地域で帰納できた事実が、他の地域であては

まるとは、かならずしも言えない。一般化のできにくい方言の科学であるから、よけい面白いのである。

6 方言の成立、変容について

ここでは、方言事実の静視から生じた連想にもとづく質問が、多く提出されている。

「方言の発生と漢字をくずして読むこととは、似通っているか。」「方言は、ことばを文字でなくて、耳で覚えたために生じたものか。」「事業所で、品物の名前、工法を一個人が名付け、それを多数が採用した場合も、方言の成立と言いうるか。」「同一地域内にさえ語形の変化が見られるのは、なぜか。」「最近の若い世代の者は、自分の方言と他の方言との混成を、いっそう早めていると思う。」「小さいころ使った方言を使いたくても、使う場がなくなった。」

これらは、学習者が、身の回りのことばに目を注ぎ、とらえたものばかりである。鮮明な問題意識が見える。これらの中には、階層差にもとづくことばのちがひ、つまり階層方言として考えるべき問題もある。

学習者の、熱心に勉強している様子が、知られよう。

7 方言の伝播（通時性）について

方言は動態である。方言の動きをとらえることは、やさしくはない。いろいろの角度からの質問が、よせられた。

「言語地図の作成方法は？」「地図上の符号間に、意味があるか。」「おたまじゃくしの図の読み方の説明」「方言の伝播につれて、どうして方言が細分化されるか。」「目高の図の説明」「東西方言境界線の10本の等語線の意味」「どうして藩境に、方言の境界ができたか。」「方言と通勤圏、流通交易圏、買物圏、遊戯圏、宗教生活圏との関わりについて説明せよ。」「方言周囲論とは？」「東北弁と出雲弁とがどうして似ているか。」「特定の藩域圏で証明できたことが、全国に一般化できるか。」

言語地理学の入口の説明から始まって、生活文化の方向性に至る次元の高いものまで、質問の内容は多様であった。どうして、と問われるとき、必要十分な回答を出しにくいのが、方言伝播を考えるばあいの、むつかしさであろう。

8 方言、共通語、標準語

これは、地域生活のことばに慣じむ者の、最も切実な問題であろう。これは、家庭におけることばのしつけの問題や、学校教育における方言不使用方法との関連においても、熟慮しなければならない。方言から共通語へ、さらに標準語への変化を指摘しただけでは、

問題の真随をとらえたことには、ならないだろう。

「方言で話すと恥ずかしいと考えていたが、こうして勉強してみると、共通語よりもていねいな話し方が多いのに驚く。」「方言の持つ素朴性、封建臭を嫌悪する人たちもいるのではないか。」

方言への価値を高揚せしめ、復讐させることの困難は、心情的なものの改革が不可能に近いからである。それを、生活者自身も、自覚しているのである。

次のは、先の(六)のばあいと類似するが、方言の「変化」に着眼した質問の数々を、ここでとりあげる。「それぞれの地域の方言としての色合が濃厚なものは、なぜ早く、姿を消すのだろうか。」「消えやすい方言と消えにくい方言とのちがひは、どこにあるか。」「古語が方言に残る範囲を知りたい。」「万葉集の東国方言は、全国にどの程度に、残っているか。」「文中の助詞類は、どうして変りにくいか。」「方言の衰退では、敬語の消えていく傾向が大きいと思う。」「方言という文化が衰退していくことへの、私たちの態度は、どうあるべきか。」

それぞれの質問や意見は、貴重なものが多い。また、次のように、方言衰退の動きを認めつつも、方言の存立についての態度を問うものがある。

「方言形から共通語形への移行は、学校教育等の影響から避けられないようだが、その基盤は、将来、どのように温存されていくか。」「方言の表現がていねいで、標準語の方が簡単であることが多い。標準語化が、はたして、文化的意義において、進歩と言えるか。」「発展性を有する方言の特色は何か。」

方言の研究に従事するものは、適切な倫理観のもとに、一般社会人の要望を十分にとり入れて、実効ある研究をも、推進しなければならないと、思ったことである。

9 日本語の起源と方言について

方言の研究者は、ある特定地域の方言研究に専心しがちであるが、日本語も、世界の言語の中では一方言であるとも考えられる。広い視野に立って、方言研究の視点から日本語の起源を問われたとき、私どもは、いかなる見解を示しうるのであろうか。

「方言の探求によって、日本人の移動状況を知ることができるか。」「広島県地方の北奥は、和鉄の産地で、かつて数万人の移入者がいたという。その事実によって、土地の方言にどんな影響があったか。」

「日本語の起源を、方言研究の見地から話せ。」
巨視的で、総合的な見方の重要なことが、知られよう。

10 方言と文化の将来について

中央と地方との距離感が縮少し、生活様式の画一化が進んで来ている今日、方言という文化の存立をどのように評価し、今後の知的創造の基礎となすかは、誰もが考えなくてはならない問題であろう。受講者は、次のような質問や意見を述べている。

「方言生活の中で継承され、定着してきた地方文化を、文化行為として高揚していくため、次元をより高めていくためには、時系列的考察にとどまらず、今後は、いかなる方向へその課題を求めていくか。」

「ことばと文化の方向性について説明せよ。」「方言が地域社会の生活や人間と深く結びついていることは、勉強できたが、文化の体系づくりへの視点が弱い。」「方言は、マスコミにおける外来語のように、必要悪みたいなものか。」「方言の研究は、個々の実態がわかれば、それだけでよいのか。」「文化の伝播に時間差がなくなった現在、従来の周囲伝播の理は、もはや過去のものとなっていくのではないか。」「方言を、日常の社会生活に適合させるのには、どうしたらいいか。ただ、方言を使って話すということだけでいいか。」「過疎化社会での方言使用と過密化社会での方言使用を比べて、どう考えるか。」「方言の中での、美しいことばに、どんなものがあるか。」

さて、方言を、滅びゆくものとするか、あるいは無限に創造されていくものとするかによって、将来への展望のしかたも、ちがってこよう。筆者たちは、後者の考えに立っている。方言は、量的に少なくなっても、消滅することなく、新しい方言が、大小の社会で形成されていくものである。その方言が、人間同志の心の円滑な疎通を保っていると言える。

筆者は、テキストの最後に、次のように記している。¹²⁾

「方言生活を文化行為として高めていくために……

①ことばを、方言を、心で使い、②より豊かな方言生活を志向する態度で、③方言生活が文化行為として高揚されるようにと次元を高め、④毎日の言語生活の中で、心がけて実践し、⑤論理の美がことばの美となって輝くように努力したいものである。

こうして我々は、もはや、方言を使おうが共通語、標準語を使おうが問題ではないと考えなければならない。表現は、いかに心がこもっているか、自己の思っていることを十分に表わせたか、ということの方が価値高いものとしなければならない。

我々は、深みのある楽しい言語生活に生きたいものである。」

この結論を、筆者は、いまも正しいと考えている。方言を特別のものと見る絶対観をやめて、言語生活上の一選択枝と見る相対観に立っている。したがって、方言を固定的な文化財と見て、それを保護しようとは考

えない。私どもは、自己のことばとして具有する方言の自由さを尊重することにより、より豊かな表現へ高めるように、自覚を持つことが、大切な課題であると考へたい。

方言は文芸のためにあるのではない。人と人との心の表現、理解の喜びのためにある。方言会話の生き活きた全体が、文化行為と見られるなら、方言を軽視することは避けなければならない。

以上が、スクーリングにおいての受講者の質疑を分析した大要である。演習指導に出席した受講者は、長時間にわたって、活発な質疑応答を行なった。その熱誠には、感服せざるを得ない。

おわりに

放送を利用した広島大学公開講座「方言と文化」は、多大の成果をもたらしたと思う。その実施に関する諸事実とその問題点については、前篇で簡略に述べたとおりである。また、後篇では、演習指導における受講者の諸質問の分析を通して、一般社会人が「方言と文化」に関して、いかなる関心・問題意識を持っているかを、報告した。このように掲げられた意見の数々は、今後の研究者が解明しなければならない重要な問題も、含まれているようである。筆者は、ともすれば見すごしてしまいそうな面接指導における受講者の意見を、大切にとりあげて、分析してみたのである。それらの意見や質問が多岐にわたっていて、筆者ら講師の、回答しきれないものが多いにつけて、方言研究を仕事とする者は、総合的人間としての識見を持たねばならないと、省察せしめられたのであった。

今後も、放送を利用した「方言」に関する公開講座が、種々の方法で、行なわれるであろう。その時に、筆者たちの一実践が、幾らかの参考になるのではなからうかと、考える。

受講生は、自己の人生での目的に応じて、「方言と文化」を、真剣に学習し、それを明日の生活に生かそうとしていた。筆者たちが行なった「方言と文化」の試みは、先に、生涯教育または生涯学習の一つと見なされると述べたが、ここに至って、その感を強くすることができた。

公開講座「方言と文化」は、広島大学の一事業であると共に、筆者たちにとっては、地域に根ざす方言を、大学でのテーマとする時、一般市民がどのような学習対応をするかについて考察する機会でもあるという二面性を持っていた。両面を、上述の如く報告し、考察を行なった。ここに、大学という固定的な枠にとらわれ

ないで、広く、今日的な課題としての「方言と文化」に関する生涯教育、または生涯学習を、実験し、諸問題を帰納することができたと考える。

註

- 1) この委員会は、広島大学が行なう放送教育実験の実施に関して、必要な事項を審議する。委員長は学長（竹山晴夫）、副委員長は学生部長（神原豊）であった。他に、学長が指名した13名の委員により、構成された。
- 2) これは、国立大学共同利用機関である「放送教育開発センター」の依頼により、広島大学が独自に企画実践するものである。実質的な施行の方法は、昭和51、52年度の場合と同様である。
- 3) これらのテーマは、昭和53年4月13日（木）に行なわれた第1回目の放送教育実験実施委員会において、決定された。
- 4) NHKラジオは、昭和31年4月に、新しい番組「NHK国語講座」を企画し、「方言の旅」として、各地放送局から放送した。それをまとめたのが、『NHK国語講座 方言と文化』（昭和32年10月、宝文館）である。これは、教養的な内容の読みものである。
- 5) ラジオ講座「方言と文化」と同時に実施せられたテレビ講座「日本国憲法」「生物の進化を考える」に関しての解説は、すべて省略する。
- 6) この表は、広島大学学生部教務課が作成したものである。
- 7) 瀬戸川俊治氏（比治山女子短期大学教授）は、昭和53年6月21日に、急逝された。「あいさつことば」に関する遺稿を、テキストに載せている。
- 8) この回の原稿は、町博光（現広島女子大学講師）氏が主に執筆した。放送番組は、室山敏昭氏と共同で作成された。
- 9) この小冊子は、昭和53年度の制作方針が書かれた簡単なメモであった。
- 10) 試験問題は、神鳥武彦氏が作成した。
- 11) 岸本幸次郎氏は、すでに、次のような研究成果を発表しておられる。「放送大学に関する研究—放送大学構想と広島大学実験番組における学習構造の分析を中心に—」（「広島大学教育学部紀要」第26号、1977年）、「放送大学に関する研究（2）—広島大学放送教育実験番組講座（第2年次）の調査結果を中心に—」（同上、第27号、1978年）
- 12) 『広島大学公開講座 方言と文化』（広島大学放送教育実験実施委員会編集・発行、昭和53年10月、p 215～216）

参 考 文 献

- 1) 『昭和52年度 放送大学の学習指導に関する実験報告書』（広島大学）
- 2) 『昭和53年度 放送利用の大学公開講座に関する実施報告書』（広島大学）

（付記一）

本講座科目の計画立案に際して、藤原与一先生の御指導をいただいている。記して、感謝申しあげる。

（付記二）

公開講座用のテキスト『方言と文化』を基礎とし、それに数章の補充、訂正を行なって、のちに、神鳥武彦氏編『日本語方言学 — その課題と方法 —』（東京堂、昭和54年8月）が出版された。

A Study on the Extension Course of Hiroshima University by Broadcasts
— On the Subject “Dialects and Culture”—

Yoshio Ebata

Nowadays, it seems that Japan is going to change into an era of life-education or learning-society, the tendency of which is desired by the present society. People wish to learn not only at the school, but also, if possible, freely after graduation.

The extension course of Hiroshima University by broadcasts was tried from October, 1978 to January, 1979. The present author recognized this attempt as one of epoch-making events in the developmental histories of life-education or learning-society in Japan. From this view point, the author has studied how the extension course was carried out and how the applicants to the course learned.

The present paper is divided into two parts. One is the description of the extension course “Dialects and Culture” by radio.

1. A summary of the extension course
 - 1.1 advertisements for the invitation of applicants
 - 1.2 methods of schooling
 - 1.3 the last examination
 - 1.4 the certificate for the course completed
2. A study on the performance of the extension course
 - 2.1 the objects
 - 2.2 the view points to construct the subject
 - 2.3 the contents of the subject
 - 2.4 the considerations to make the textbook
 - 2.5 How use the textbook over the broadcasting?
 - 2.6 the attentions to plan the radio programs
 - 2.7 the various problems to construct the radio programs
 - 2.8 the last examination

The other is the study on the questions and opinions which the learners offered at schooling. Their questions and opinions over 90 have covered many fields in human sciences. The author classified them into 10 groups as follows;

1. The explanation of the terms
2. the pronunciation
3. the dialect grammar
4. the vocabulary
5. the phase of dialects
6. the coming up or change of dialects
7. the circulation of dialects
8. dialects, common language, standard language
9. origin of the Japanese language and dialects
10. the future of dialects and culture

The applicants learned the extension course "Dialects and Culture" hard' according to their purposes, and wanted to use the knowledge for their lives thereafter.

In conclusion, the author has thought this trial gave the society enormous influences and good effects. When the next broadcasting course is scheduled in future, certainly our trial will be useful.